

## 大谷さんと私

市川行和

yukitikawa@nifty.com

私が大谷さんと初めて会ったのは彼がプラズマ研に就職して間もなくだったと思う。原子分子データの仕事に参加するために時々プラズマ研に出かけたので、その時に出会ったのであろう。その後まもなくして私もプラズマ研に勤めるようになって、同僚となった。しかし、所属が異なるので、それほど頻繁には会う機会はなかったように思う。

プラズマ研時代のことで記憶にあるのは、彼と二人で、二週間ほどアメリカを旅行したことである。1980年3月、日米協力の一環として、アメリカにおける原子分子データ活動の様子を見てくることが目的であった。その頃はアメリカもゆとりがあり、滞在中は訪問先の研究者が付きっきりで世話をしてくれた。したがって、大谷さんと二人きりでいることはあまりなく、何を話したかも覚えていない。確かまだ在外経験もあまりなかったことと思われるが、大谷さんは堂々としてアメリカの研究者と渡り合っていたのが印象に残っている。

その後二人とも東京へ移り、さまざまな機会に一緒になった。特に、国際会議の世話や大型共同研究の企画・運営など思い出せば限りがない。大谷さんはどんな頼みも引き受けてくれるので、こちらも彼の頼みは断るわけにいかない。そんな間柄だった。

最後に彼とした仕事は「原子分子物理学ハンドブック」の編集である。私が定年退職してしばらくたったころ、突然彼から電話がかかってきて、ハンドブックの編集を手伝ってくれないかと言ってきた。私は何回か編集の経験があり、それがいかに大変なことであるかを知っていた。最近はあまり責任のある仕事は引き受けないようにしていると言って、

いったんは断った。しかし「業界」のためだとかなんだとか粘られ、ついに引き受けることになってしまった。もっとも大谷さんならなにか問題が起こっても解決してくれるだろうという目論見もあった。それから約3年、彼との共同作業が続いた。特に初めの1年は頻繁に彼と打ち合わせを行った。この作業を通じて大谷さんについてもっとも強く感じたことは、彼が大変辛抱強いということである。私はどちらかという気が短く、早々とあきらめてしまう。しかし彼は粘り強くことを進め何とか少しでも良いものを作ろうとする。まさに実験屋にはうってつけの性格である。二人の性格のせめぎ合いの結果出来上がったのが、皆さんがご覧になっているものである。何とか3年で出版にこぎつけた。出版社に言わせれば、これは予想以上に早い出来上がりだそうである。ただ不満なところもあり、将来改訂する機会があったらこんな風になりたいと二人で話し合った。しかしそれは永遠に不可能になってしまった。

大谷さんは私より5歳年下である。しかし年下の後輩というよりも、同じ年頃の仲間のように思っけて付き合ってきた。40年来付き合ってきた仲間が突然いなくなったというのが私の現在の心境である。心からご冥福をお祈りしたい。

(2014年10月13日)